

SBL 元氣倶楽部

恩返し経営 —大好きなことを仕事に—

海外有名自転車ブランドの輸入代理店を運営されている、中田社長にお話を伺いました。

経営者 Interview

株式会社 コリドーレ

代表取締役 **中田 真琴** 様
Makoto Nakata

競技自転車との出会い

私の生まれは北海道札幌市で、小学校では少年野球をやっていました。他の同級生たちが車で試合会場まで向かうところ、どんなに遠い会場であっても自転車で通っていました。

スピードが出る乗り物が好きで、自転車を速くこいで誰よりも早く会場に着いていたのですが、周りからは危険だからやめた方が良く心配させていました。

そして5年生の時に20Km離れたところに引越すことになり、転校前の友だちに会いに週1回自転車で遊びに行っていました。その道中で自転車がパンクしてしまい、修理のためにに入った自転車店でスポーツバイクの存在とその競技大会があることを知りました。

得意なもので褒められたくて、自転車の大会に出たかったのですが、競技用の自転車が必要でした。大会に出るためパナソ



中学2年生での初レース

ニック製の73,000円の自転車を親に催促しましたが、断われてしまいました。

自転車競技へ

そこで、スポーツバイクを購入するための資金を貯めることにしました。

誕生日やクリスマスなどのプレゼントは物ではなくお金でもらい、お年玉を貯め、家の雪かきを1回100円で手伝いました。

中学校では、自転車競技部がないので、体力をつけるために17時までバスケットボール部、そのあと19時30分まで野球部に掛け持ちで在籍しました。そしてようやく中学2年生の4月にお金が貯まりました。

中学2年の5月下旬に初レースがあり中学生の部で6位入賞でした。中学3年生もいる中での入賞に周りは驚いていましたが、私は悔しくてさらに練習しました。



インターハイ決勝に臨む



大学4年時の国際大会

大人の大会に出場！

翌年の中学3年の時には、中学生では敵なしで、ヨーロッパでプロになりたいと思うようになりました。

その思いから、北海道の自転車連盟に、大人のクラスで大会に参加できるように働きかけました。連盟からは、中学の部でブッチギリで優勝したら、大人のクラスで走ることを認めてもらいました。そして実際にブッチギリで優勝し、大人のクラスで出場することになりました。

大人の部でも、北海道で2、3位に入りました。中学生の最後に、伊豆で全国の中学生の大会で2位に入ることができました。

佐藤琢磨氏と切磋琢磨

中学校では、ショップの自転車チームに所属して活動していましたが、高校は自転車競技部がある私立の工業高校から特待生としての招待があり、そこに進学しました。

札幌市内の進学校に進学できる学力があり、周りの反対がありましたが、迷いはありませんでした。

高校では、インディカードライバーで有名な佐藤琢磨氏と知り合いました。彼はドライバーになる前は自転車競技をやっていて、インターハイで優勝するほどの腕前でした。

お互いライバル同士でしたが、進学について語り合っていて、早稲田大学のスポーツ受験枠を受験し、無事2人とも合格しました。佐藤氏は、大学2年のときに自転車競技を辞めてイギリスに渡り、カーレースの道に転向しました。佐藤氏とは、その後も定期的に連絡を取り合っており、海外でスポーツ競技をするときに受けた文化摩擦や日本人差別について励まし合いました。



佐藤琢磨氏とトレーニング

プロ競技者への道

私は大学3年の時、日本とイタリアの合同チーム“NIPPO”の大門監督からお誘いがあり、大学を休学して1シーズン海外で競技生活を送りました。大学のクラブも一旦退部することになりました。

この大門監督との出会いが、社会人になった後の競技生活に影響を与えることとなります。

NIPPOは、日本の会社で、1987年から30年以上にわたり、自転車ロードレース競技をサポートし続けています。



NIPPOでのプロ時代